



TITLE:

## 1.概要(Ⅲ 共同利用研究)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

1.概要(Ⅲ 共同利用研究). 霊長類研究所年報 1983, 12: 36-37

ISSUE DATE:

1983-01-19

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163054>

RIGHT:

### III 共同利用研究

#### 1. 概 要

本研究所は霊長類に関する共同利用研究を公募により行なってきたが、昭和55年度からはこれを「一般共同研究」と名づけ、新たに霊長類研究所教官の企画による「計画共同研究」を加えることとなった。したがって昭和56年度共同利用研究の募集も「1. 研究課題」と「2. 研究会課題」とに大別し、前者についてはさらに「一般共同研究」と「計画共同研究」とに分けて行なった。一般共同研究の公募は、昭和52年度より開始された下記4設定課題とそれらに該当しない研究のための自由課題について行なわれた。

#### 1. 研究課題

##### A. 一般共同研究

###### I 設定課題「群れの統合機構に関する研究」

ニホンザルの群れは、どのような社会機構によって統合されているのかという問題を、広範な視点より研究し、従来の社会構造論を再検討し、新たな社会構造論の構築をめざす。

スペーシング、グルーピング、リーダー・フォロワー関係、血縁関係、順位の成立と構造、性・年齢による社会的役割、オスとメスの生活史、コミュニケーション、カルチュア等、さらにオスとメスの群れからの移出入、コミュニティに関する問題等が研究対象となる。

###### II 設定課題「各環境構造における霊長類の適応機序の解明」

霊長類には多様な適応放散がみられるが、各環境構造との対比において、霊長類の適応の機序を解明しようとするものである。

本課題においては、環境利用と生活様式、群れの遊動の様式、個体群動態、ロコモーション様式、地域個体群の諸特性、温度適応等に関する生理学的研究等のテーマが考えられ、これらのテーマを霊長類の生態学・形態学・生理学的手法を用いて、野外及び実験室において広く追求する。

###### III 設定課題「霊長類の成長・発達」

個体の成熟する過程にみられる諸変化を、

生理・行動・形態の側面から多角的に追求する。例えば、受精のメカニズム、性周期、周産期、身体の発育、神経系の発達、行動の発達等の問題を取りあげる。

###### IV 設定課題「霊長類の系統・種分化・種の特性に関する研究」

霊長類の系統や種の諸特性を明らかにし、さらに種分化の諸機構を分析する。系統や種の同定と分化機構の形態学的分析、種内の集団構造や地域集団間、あるいは種間の系統的相互関係を解明する社会学的および遺伝学的研究、生体成分の構造・機能・代謝系を解明する生化学的研究などを行う。

###### V 自由課題(設定課題に含まれない研究課題)

##### B. 計画共同研究

計画共同研究は、共同利用研究のなお一層の推進をはかり、霊長類学の総合化に寄与することを目的に企画されたもので、霊長類研究所の教官が計画、推進、まとめの中心となり、本研究所外の研究者を含めたグループにより遂行される研究計画である。

これらの研究課題について51件(109名)の応募があり、運営委員会共同利用研究専門部会(伊澤紘生、糸魚川直祐、久保田競、水原洋城)および共同利用研究実行委員会(杉山幸丸、竹中修、松波謙一、大澤秀行、松沢哲郎)の合同会議による原案を協議委員会(昭和56年2月12日)の審議によって決定され、運営委員会(昭和56年2月27日)に報告し了承された。

その結果42件(91名)が採択され、各課題についての応募採択状況は次のとおりである。

課 題	応 募	採 択
I	7 件 (9 名)	5 件 (6 名)
II	9 件 (13 名)	9 件 (13 名)
III	9 件 (21 名)	8 件 (20 名)
IV	12 件 (29 名)	9 件 (23 名)
V	13 件 (29 名)	10 件 (21 名)
計画	1 件 (8 名)	1 件 (8 名)

## 2. 研究会課題

研究会課題に関しては従来からの研究会をも含めて設定課題ごとに対応する研究会に整理統合する方針で募集し以下の6件が採択された。

1. 課題Ⅰ ニホンザルの群れの統合機構
2. 課題Ⅱ 適応論をめぐって
3. 課題Ⅲ 霊長類の生殖・成長・発達  
一成果の分析と検討一
4. 課題Ⅳ Domesticationの生態学と遺伝学
5. 第9回行動研究会。霊長類の知的行動  
一道具の使用を中心に一
6. 第11回ホミニゼーション研究会。  
一直立二足歩行の起源をめぐって一  
(杉山)

## 2. 研究成果

### A. 一般共同研究

#### 設定課題Ⅰ

#### 「群れの統合機構に関する研究」

#### 幸島群における未経産メスの社会的位置

宮藤浩子(京大・霊長研)

ニホンザルのメスの一生の中で子どもから母親への移行期にあたる未経産メスの時代は、子ども時代の社会関係から、新たにオトナの社会関係を形成する過程であり、社会的に重要な時期である。このような未経産メスを中心とした様々な Social Interaction の分析から、彼女たちの社会的位置を明らかにし、メスの生活史全般を考察することを目的として調査を行なった。

幸島においては、本年度(1981年)3頭のメスが出産を迎えた。これらのメスの関与する Social Interaction (特にグルーミングと近接)が出産によってどのように変化するのかに注目した。また、この3頭を含めて、新生児を持った10頭のメスは出産後の数カ月間、他のメスたちから積極的な接近行動を受けたが、この接近行動の方向性(接近者と被接近者)及び発現頻度の変化にも着目した。

以上、親和的 Interaction を中心とした観察結果から、群れ内におけるメスの社会的位置が未経産メス→初産メス→経産メスと段階的に変化していくことがわかった。姉妹など血縁関係にある個体同士の親和的關係は、出産を契機として極端に疎遠になる傾向があった。一方、これとは反対に、非血縁個体との親和關係は、彼らの接近行動がきっかけとなって発達する傾向がみられた。接近行動は、未経産メスや新生児を持たない経産メスだけではなく、新生児を持ったメスにもみられ、また接近の相手にはかなり高い選択性が認められた。このことから、接近行動は新生児への関心だけではなく、より社会的な motivation に基づく行動であることが示唆される。

今後は、接近行動をさらに詳細に分析してその motivation を明らかにすると共に、拮抗からの考察が必要であろう。